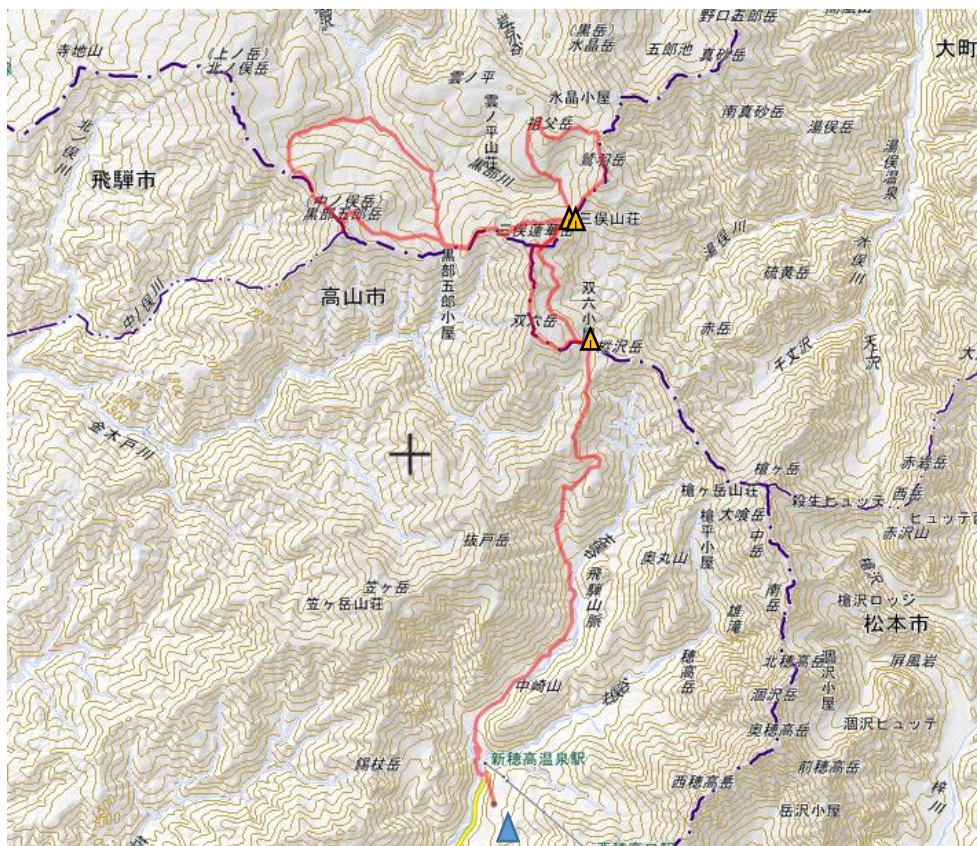


デンソー山岳部 2015年度 夏山合宿A隊報告書

- 山城 北アルプス - 黒部源流赤木沢、鷲羽、雲ノ平- (赤木沢キミは最高に綺麗だ)
- 日程 平成27年8月8日~8月11日
- メンバー 方田智貴 (CL、装備)、小田修三 (SL、記録、食糧)、亀山誠 (会計)



<第1日> : 8/8(土) 晴れ 【小田. 記】

【行動記録】 歩行時間 10H40M

鍋平駐車場(5:05) → 新穂高温泉駅(6:00) → わさび平(7:00) → 秩父沢出會一本(8:00) → シシウドが原一本(9:00) → 鏡平山荘(10:02) → 弓折乗越(11:08) → 黒百合ベンチ(12:08) → 双六山荘(12:40) → 三俣蓮華キャンプ場テン場(15:45)

自分の前日の仕事の折り合いがつかず刈谷発を21:00に変更してもらったため初日A隊の出発は少し遅めであった。鍋平から林道を抜け新穂高温泉駅に着く。いよいよ長い合宿の幕開けである。はやる気持ちを抑えながらわさび平小屋までの平坦な道を快調に登っていく。先に出発しているB隊とわさび平小屋にて合流することができた。そこから、小池新道に入り、徐々に勾配のついた登りがスタートした。皆黙々と登って行く。途中たまに後ろを振り返ると乗鞍、焼岳が遠くに見える。天気も良く、絶好の登山日和である。合宿初日から運がいい。鏡池まで登ると『池に映る槍・穂高に惹かれて小屋を建てた』といわれるだけはある景色が広がっていた。池に映る槍の写真を撮りながら、ここまでの登りの疲れを癒す。槍・穂高に囲まれた鏡平山荘で休憩をとりながら、B隊と今後の交信のルールを打ち合わせ、お互いの合宿の無事を祈り、ここからB隊と別行動とした。弓折乗越までも急な上りが続いており、なかなかしんどい。しかし、高度を上げていくに従い、槍・穂高のピークが近くなっていくのが楽しくもある。体力を随分と消耗しながら双六山荘まで到着。今日中に三俣蓮華岳キャンプ場に着かなければ明日以降の計画に支障をきたすと判断し、三俣蓮華岳キャンプ場までは今日中に行くことを決める。双六小屋から三俣蓮華キャンプ場まで巻道を選択し、登っていく、行動時間が長くなってしまったため、少し嫌な雲が出始めたため先を急ぐ。メンバーが疲れていたこともあり、ピッチはなかなか上がらず到着したのは16:00前であった。雪渓で雪をかき集め、持ち上げたビールをキンキンに冷やし、皆で乾杯。明日の赤木沢の話で盛り上がった。



鏡池に映る槍・穂高



三俣蓮華キャンプ場

<第2日> : 8/9(日) 晴れ 【方田. 記】

【行動記録】 歩行時間=15H15M

起床(3:00) → 三俣蓮華岳キャンプ場発 2500m(4:30) → 巻道1本(6:00) → 黒部五郎小屋 2350m(7:15) 1本 → 左俣1本 → 黒部源流出会 2050m(9:00) → 黒部源流 → 赤木沢出會 1976m(10:40) → 1本(12:00) → 中俣乗越 2500m(13:30) 1本 → 黒部五郎岳 2839m(15:30) 1本 → 黒部五郎小屋 2350m(17:20) 1本 → 分岐 2700m(18:30) 1本 → 三俣テン場発 2500m(19:45)

今回合宿のメイン日となるこの日、今日も天気がよく、すがすがしい朝の中、今日経験する素晴らしいであろう景色、体験に心を弾ませる。ビバーク1泊分の装備、沢装備一式、ハーネス類以外の不要なものをテントに残し出発する。三俣蓮華岳をトラバースする巻道から鷲羽岳、水晶岳を眺めながら順調に進む。途中、先行をいくソロの登山客が立ち止まっている。その理由は、熊が登山道付近にいるとのこと。凝視すると熊が、100~200m先の登山道の谷側にいる。しばらく、熊の動向を静観するも熊はいたって落ち着いた様子で登山道に向かって徐々登っているように見える。亀山さんと相談し、熊を回避するため巻道ルー

トから、三俣蓮華岳を通る稜線ルートに直登することにした。当然、ルートはなく、急峻な斜面には、ガレ岩、雪渓も残っており、『デンソー熊回避バリエーションルート』を開拓する。稜線ルートと巻道ルートの合流地点で、個人山行の松浦さんとでばったり会い、熊情報を伝え、ロスした時間を取り戻すように先を急ぐ。

黒部小屋の前の笹原を抜けると五郎沢左俣が始まる。最初は緩やかな中を下る。登山靴で石の上を渡るものの、段々傾斜が急になり水が流れる。岩は白く、日は燦々と降り注ぎ、きれいな流れの中を進んでいく。滝と呼べるようなものはないが、ところどころ大きな岩を乗り越えていく。しばらく下ると沢は大きくなり、更にしばらく下ってから黒部川源流(本流)に出会う。

黒部源流は、赤木沢出合いまで、2kmで80mしか高度を下げない、おだやかな川が流れている。連日の天気により、水量も少なく、川中には白い岩が頭を出している。右側へ、左側へと岩の頭を飛び越え、快調に歩き進んでいく。

突然、ミニナイアガラのような滝にぶつかる。そこは赤木沢出合。両側は岸壁で、水深も深い。赤木沢に入るため、亀山さんは泳ぐつもりで偵察するが、小田SLが、左側岸壁に一人一人通れる穴を見つけそこをくぐり抜ける。亀山さんは、合宿前に泳ぐつもりで海でトレーニングしてきたそうで、少し残念そうだった。いよいよ、名溪の誉れ高い赤木沢遡行を開始。次々と現れる滝はどれも美しく、ほとんどが直登できる。緑の草原と黒い森。その中を赤い川底の上を滑り降りる白い水しぶきと青い空が映える。とにかく美しい。何個の滝を超えたのだろうか、突然30m級の大滝が眼前に飛び込む。両側が岸壁であり、取りつく箇所をメンバーで相談する。亀山さんが事前調査した資料を参考にし、左壁に取りつくことにした。自身が進もうとすると亀山さんが、『ここは俺が行く』。合宿中、亀山さんが先頭を歩いたのはこの大滝攻略の時だけだった。ルートを間違えると危険だとの判断があり、先頭をお願いした。雲上の水遊びが終わり、黒部五郎岳に通じる縦走路に出る為に、小田SLが読図で、ハイ松群を抜ける最短ルートを導き出す。素晴らしい。

稜線を進み黒部五郎岳山頂への分岐で、小田君、亀山さんは、山頂へ向かう。自分は、分岐で体力回復を図り、黒部五郎岳へは次回へ持ち越した。黒部五郎小屋に到着した時点で、17:20になっていた。前日のプラン変更で行動時間は、+2hr(-0.5hrは早く出発)、熊回避で+0.75hr、沢攻略で+2.25hr(自身の見積もりが甘かった)等により、当初12:45に対して、大幅に遅れていた。黒部五郎小屋に泊まるか、三俣キャンプ場に戻るか話合い、ビバークの準備があること、三俣キャンプ場へのルートは高度差も少なく歩きやすいことを鑑み、三俣キャンプ場に戻ることにした。三俣キャンプ場近くで、日も落ちヘッドランプを使うことになったが、無事到着した。

テント内で、赤木沢遡行を振り返り、当初WEBで見つけた素敵なフレーズをサブテーマ『赤木沢、キミは最高にきれいだ』に対して、攻略した感想としては、『赤木沢、キミは最高にきれいだ！』と語り合った。同時に、本日の予定時間超過の反省会、明日のプランニングを実施し就寝。



巻道での熊との遭遇



赤木沢出合



<第3日> : 8/10(月) 晴れ 【小田. 記】

【行動記録】 歩行時間 10H15M

起床(5:00) → 三俣蓮華岳キャンプ場発(6:30) → 鷲羽岳山頂(7:37)-発(8:07) → ワリモ岳(8:37) → ワリモ北分岐(9:07) → 祖父岳(10:00) → 雲ノ平(10:40)-発(11:00) → 1本(12:30) → 三俣テン場(13:05) -発(13:48) → 三俣蓮華岳(14:42) → 双六小屋(16:45)

前日のテン場到着が遅くなったこともあり、休養をしっかりとることを考え3日目はゆっくりと動きだした。当初の予定であった高天原は取りやめ、行動範囲を縮小するコース取りとした。この日も快晴で気持ちが良い。今回の合宿は本当に天候に恵まれているなあとしみじみ感じながら鷲羽岳を目指す。鷲羽山頂からは北アルプスを一望できる絶景であった。槍、穂高、笠、黒部五郎、薬師、水晶が見え圧巻であった。昨日走破したルートを山頂から思い描きながら、よく歩いたものだと感じ入った。ワリモ北分岐で流石に水晶登頂は無理だなと話しながら、雲ノ平方面へ向かう。祖父岳から見た雲ノ平は雄大で素晴らしかった。木道のある辺りまで降りて、雲ノ平を一望できる場所で一本をとった。天気は快晴で我々の間を心地よい風が通り抜けていく。しばらくの間『日本最後の秘境』を堪能した。ところどころにミヤマリンドウやチングルマの穂が咲き誇っており、綺麗であった。そこから黒部本流の源流へ下り、再び三俣蓮華キャンプ場に13:00過ぎにもどり、テントを撤収する。我々の張っていたテン場に入れ替わりに入ってきた若いソロの登山者も新穂高から入ってきたとのこと。この時間にここまで来ているとはかなり早いペースで登って来たに違いない。我々ももっと体力をつけなければと反省した。稜線に沿って三俣蓮華岳に登り、双六方面に抜けていく。午後になって雲が出てきており、稜線上ではガスで何も見えない状態であった。双六小屋に着く間際でついに雨が降り出し、急いで小屋に駆け込んだ。ずっと天気の良い日が続いていたがこの日だけは最後に雨に降られてしまった。亀山さんがテン場の偵察に向かいB隊のテントを発見。隣に丁度空きスペースがあったため、そこにテントを張って、A隊とB隊の何名かで今回の合宿の行程を振り返りながら話に花を咲かせた。



鷲羽岳山頂



<第4日> : 8/11(日) 晴れ 【方田. 記】

【行動記録】 歩行時間=5H00M

起床(4:00) → 双六キャンプ場発 2450m(5:30) → 鏡平山荘(7:10)1本 → 小池新道水場(8:25)1本 → 新穂高ロープウェイ(10:30)

最終日も、素晴らしい天気朝を迎えた。北アルプス最深部へ次回来れる日はいつになるだろうと考えながら、別れを告げ下山開始。左手の槍ヶ岳を見ながら、この4日間晴れでよかったと、本当に感じながら歩く。最終日は、ほぼ下りで、快調に高度を下げる。すれ違う人たちも多く、夫婦、カップル、ツアー

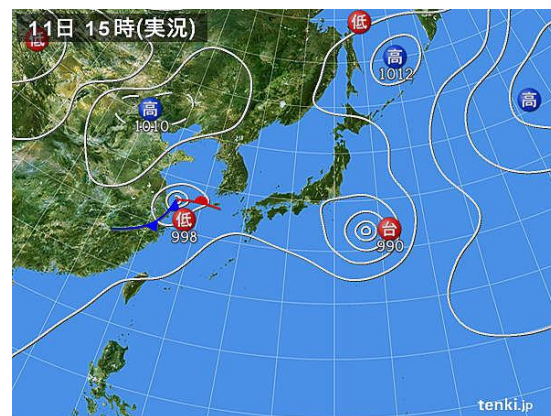
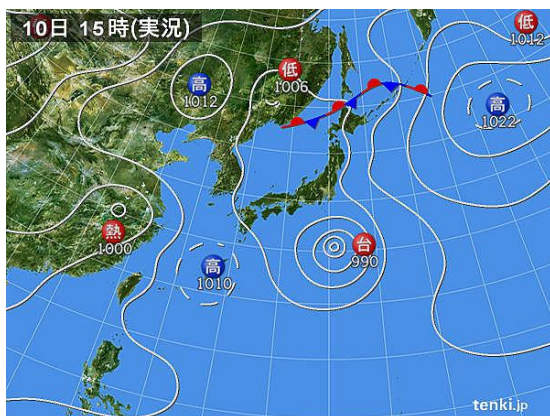
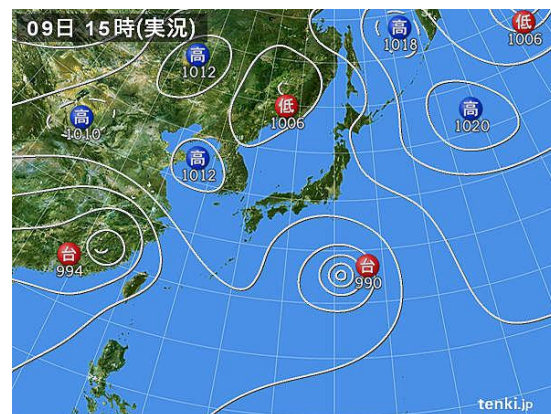
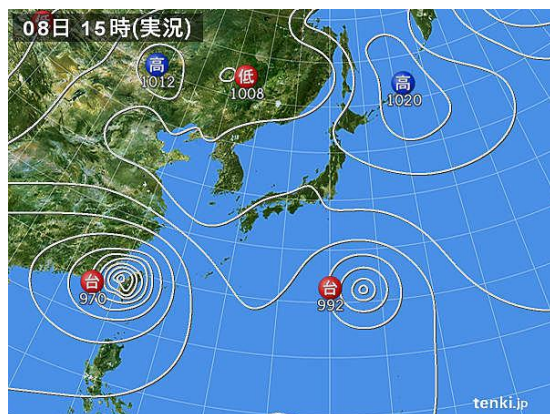
客が登っていく。新穂高ロープウェイから鍋平駐車場までは、標高も低く、気温も高く、前日までの疲れも重なり、第1ロープウェイを使う。ロープウェイは一般客も多く、収容人数一杯であった。洗剤の香りなどで、いい匂いだなあとほっとする一方で、4日間お風呂に入っていない自分の近くにいる人には申し訳ないと思いながら、鍋平Pに到着。ひがくの湯で、『登山の湯』に入り4日間の疲れを癒し帰路に着く。

【装備 方田】

歩行時間が長く、かつ、通常の夏装備に加え沢装備も増える為、軽量化が必要だった。ガス缶2.5に対し、実質1缶程度しか使用しておらず、0.5缶は不要だった。

3名だった為、共同装備は分散できたと感じるが、仮にメンバーが2名となった場合には、共同装備としてのテントがない為、今後準備していくのも手かと感じた。また、今回ビバークの可能性が少なからずあった。ツェルトの使い方なども、平地合宿では実施したほうがよいと感じた。

【気象】



8/8-8/11の間、日中は晴れ。午後は曇り、一部雨であった。合宿中を通して天候には非常に恵まれた。

【食糧 小田】

今回は軽量化のため、すべてご飯をアルファ米とした。軽量とともに、熱湯のみで15分でできる点は今回のように行動時間が長くテントでの時間が取れない山行では大変便利である。今後も活用していきたい。冷麦は初めて試してみたが、水が少ないことと茹でた後にすすぐことができないとドロツとした仕上がりになってしまう。あまりお勧めできない。

【会計報告】

【費用】 一人あたり 10,110円

・食材・嗜好品 3,931円 : ラーメン、冷麦、そうめん、コーヒー、海鮮サラダ、アルファ米(亀山提供)、蜂蜜、おつまみ他

| | | |
|--------|--------|-------------------------------|
| ・テント場 | 9,000円 | : 三俣山荘(2泊)、双六山荘 1000円/人×3人×3泊 |
| ・高速道路 | 8,840円 | : 4,420円×2(往復) |
| ・ガソリン代 | 6,990円 | : 片道移動257キロ、レギュラー136円、10キロ/ℓ |
| ・車消費費 | 2,570円 | : 5円/キロ(257キロ×2×5円) |
| ・その他 | 1,000円 | : 差し入れ |

以上合計 30,331円

【差し入れ】不破さん、金子さん、ありがとうございました。

【リーダー所見 方田】

シーズンを通して初の合宿リーダーを担当した。今回の合宿の目的である中堅登山技術向上の一つに、自身のリーダースキル向上もあった。残り2名が実力者であり、多くのことを助けられ、教えて頂いた。特に今回、沢のコースタイムの見積もりが甘かったことも重なり、日没後の行動となったが、それでも安全に無事ベースに戻れたのも、実力者二人がいたからだと感じる。リーダーの役割として最も重要なことは、メンバーを無事下山させることだと思う。今回、そのために、リスクを何でみて、いつ判断して、どのように対応するのかが大切であると学んだ実りのある合宿だったと感じる。

日本一の美渓ともいわれる黒部源流赤木沢の遡行は、素晴らしく。日本最後の秘境と呼ばれる雲ノ平は雄大で最高だった。これらを感じさせてくれたメンバーに感謝、天気感謝、北アルプスに感謝。

【感想】

熊出没や、長時間歩行、その他、、ありましたが、天候とメンバーに恵まれ、

大変楽しく充実した合宿となり、二人には感謝の気持ちでいっぱいです！

又、中堅メンバーのスキルアップにも繋がる内容のある合宿となったと思います。

方田CL・小田SL、ありがとうございましたm(_ _)m

「君たちも、赤木沢も最高にステキだよお！！」亀山

天候に恵まれた北アルプス深部の歩行は素晴らしい景色の連続でした。日々の喧騒をしばし忘れることができ、本当に充実した山行でした。絶景の北アルプス、ルート上を動かない熊、黒部源流に繋がる枝沢への入口、透き通るような黒部源流、次々と連なる滝、想定外の長時間歩行、どれも鮮明な記憶として残る山行になりました。

これだけの充実した山行をやりきれたのも同行メンバーのおかげです。色々な経験ができた、学びの多い合宿でした。メンバーと北アルプスに感謝。小田